

女性 経営者 に聞く! +プラス

限界ラインを
引かず、
前へ進む



福島県合唱連盟 副理事長

小針智意子氏

今回のインタビューは福島県合唱連盟の小針副理事長から、ご自身の教員人生と合唱への情熱とこれまで取り組まれてきた数々の改革についてお聞きしました。

1. ご経歴について

矢吹▶ 本日は、お忙しい中お時間をいただき、ありがとうございます。まずはご経歴についてお話いただけますか。

小針▶ 生まれは石川町です。教員のキャリアをいわき市上遠野中からスタートさせ、当時県内でも有数の大規模校（1学年11クラスという規模）であった白河中央中で10年間を過ごしました。その後、須賀川二中、郡山二中、郡山五中を経て、2024年

3月に郡山一中で退職しました。

矢吹▶ 各学校でかなり長く勤務されていたのですね。

小針▶ そうですね。結果として新採用は別として一か所に長く留まりましたね。でもどの学校も忘れられない思い出がたくさんあります。

2. 合唱への道程について

矢吹▶ 小針さんはオーケストラをされていたと聞きますが、合唱に轉身されたのはなぜですか。

小針▶ 私の小学校、中学校時代の部活動はオーケストラでした。当時から郡山二中には素晴らしいオーケストラがあって、中学生ながら憧れていました。

また、小学生の頃から素晴らしい先生方との出会いがあって、教員を目指すきっかけになったと思います。小学生の頃の作文に「将来の夢は音楽の先生」と書いていました。

矢吹▶多感な時期に良い先生に出会うことって、人生を変えてしまいますね。

小針▶そうですね。出会いは大事だと思います。だからこそ、学校での生徒との出会い、教えることは本当に大切に重要なことですね。自分自身の責任も痛感します。今、社会が混沌としている中でも、子供たちをどう育てるかは非常に重要ですが、学校の役割も少しずつ変わってきています。

矢吹▶どのように変わってきていると感じられていますか？

小針▶少子化や働き方改革が大きな原因になっていると思いますが、部活動や学校行事を含む教育活動の縮小、教員の減少、そして保護者との関りなども希薄になっていることを感じます。私が若いころはそれらのことで教員として育てていただいたように思います。また、教員の年齢層のアンバランスさも感じます。私もその一人ですが、教員のなり手が少なくて、退職した教員の数が多い。このバランスの悪さは社会のひずみにも似たものだと思います。

矢吹▶保護者との関わり方について、もう少し詳しくお聞きしたいのですが。

小針▶はい、いい悪いは別として、昔は保護者とももっと密な関係で、地域と学校で子育てをしていく絆が強かったように思います。勿論、時代が違うと言われればそれまでなのですが。今の時代は共働きがほとんどですし、プライバシーに関わることでもあるので難しいことは承知の上ですが、学校教育は子供と保護者と教員でPTAのわけで、学校からのお便りや、子どもの会話からだけではなかなか分かり合えないところはあります。昔のような家庭訪問はなくなり、学校に行くことも年に数回かもしれませんが、保護者の方にはなるべく学校に足を運んでいただき、教員と話す機会を逃さないでほしいと思います。私も至らないところもあり保護者からご指導をいただいたり、逆にこちらからアドバイスをしたり、いろいろな経験がありますが、腹を割って話すことによってそれまで以上に信頼関係が生まれ、子どもが卒業した後もお付き合いが続くというような方もいらっしゃいます。

矢吹▶今の時代、先生方も大変だとお聞きしますが、如何ですか？



小針▶大変なのは大変だと思います。しかしこれは学校に限ったことではなく、働くことはすべて大変だと思います。私は今、学校で非常勤講師をしていますが、若い先生方を見ていると、本当に気の毒なくらい遠慮していますね。大学生から社会人1年生が学校の教員というのも辛いところでしょうか。「学校はサービス業です」と言われたこともあります。サービスとは親と子供のご機嫌を取ることではないと思います。その本質を履き違えてはいけません。学力だけではなく、生活の仕方、生き方など、それぞれ、社会に出て困らない教育を義務教育からすべきであると思います。

矢吹▶そのバランスが重要ですね。



小針▶本当にそうですね。学校教育は学校内のすべての活動が教育に価値があります。社会の縮図と言っても過言ではありません。給食や清掃の時間も大事です。最近では清掃を毎日しない学校もあるように聞き疑問に思えます。教育としつけは切っても切れないことだと思います。休み時間一つとっても、人との関り方だったり、部活動はその最たるものです。

3. 改革と挑戦

矢吹▶お話を聞いていると、小針さんは本当に改革志向の方ですね。

小針▶どうでしょう。ただ、「前年度踏襲」という言葉は好きではありません。変化なくして新たなものは生まれないので、前と同じことをやりたくないのです。もちろん、以前の方法もその時々でよかったと思いますが、既に社会や状況は変わっているのです。同じことをやったら、それは退化しているのと同じですね。

矢吹▶そういった改革の具体例をお聞きしてもいいですか。

小針▶常に私だけの力で動いているわけではありません。アイデアは出しますが、それに賛同して、志を同じくしてくれるスタッフがいなければ成し遂げることはできません。須賀川二中では修学旅行の規定概念を外し、金沢、白川郷、高山に行き班別活動などを行いました。高山の班別行動は私服OKにしたり…。当時は画期的なことだったと思います。白河中央中学校、郡山第二中学校では周年行事に全校生徒、先生方も入って（中央中では保護者や地域の方も入って）ベートーベンの第9合唱付きをすべて自前で行いました。伴奏も管弦楽部の生徒が中心です。勿論、スタートは反対意見もあるし、活動の過程においても容易なことではありませんでしたが、やはり苦労した分、成功した達成感は大きかったです。関わった皆さんや地域の方も喜んでくださいました。

4. 合唱の持つ力

矢吹▶そういう体験を通じた学びというのは、本当に大事ですね。先生は、その後どのような形で合唱に関わっていかれたのですか。

小針▶ 中学校の音楽の（義務教育の）教員でしたから、授業はもちろん、部活動で合唱を指導していました。クラス担任や学年主任もやりましたので、様々な仕事の中の一番専門の部分が音楽であり、合唱指導でした。合唱については部活動の合唱だけではなく、クラス合唱や学年合唱、全校生での合唱にも力を入れました。合唱の持つ力は、大きく二つあると思います。一つは音楽面です。合唱は一人ではできない。周りの力が合わさってはじめて成り立つものです。私は生徒に「合唱は社会の縮図だ」と言いますが、例えば50人で歌えば一つの音楽ができる。一人で歌ってもうまかないかもしれませんが、みんなで支え合いながら、初めて美しい音楽ができるのです。勿論一人一人がその一員であることもわかってくるはず。もう一つは社会性です。合唱を通して調和、協調性、努力、忍耐力など人間力が育ちます。この力が高校やその先のステップでも発揮されている教え子たちを見ると本当にうれしくなります。

矢吹▶ コンクールで優勝することより、それ以前に合唱を継続することですね。

小針▶ そうです。中学卒業で合唱が「ごちそうさま」になることは、私にとって失敗です。でも幸いなことに、中学卒業後も高校で、大学で、そして大人になってもやり続けている子たちがいます。それが本当に嬉しいのです。

5. 合唱塾について

矢吹▶ 先生の影響力の大きさが伝わってきます。では、合唱塾についてお聞きしたいのですが。

小針▶ 2019年に合唱塾を始めました。きっかけは、働き方改革と部活動の地域展開です。部活動の時間がどんどん削減されてきました。週に何回休めとか、何時間以内でやれとか、非常にやりにくくなってしまった。ゆくゆくは部活動を学校から切り離して、社会教育に移行することになります。ただ、これは



都会型の発想です。東京なら、スポーツクラブもダンス教室も、絵画教室その他たくさんの中で選り取り見取りです。でも福島県に置き換えたときに、本当にそうした受け皿があるのか？答えはノーです。

矢吹▶ 地域の教育インフラの課題ですね。

小針▶ その通りです。小学生から中学生にかけての縦のつながりが大事ですから、部活動を小中学校でやらなくなったら、高校も衰退してくると思いますし、それは避けなくては行けない。文科省が既に決定してしまったことですから、ずっと文句を言っても仕方ない。だから「動きましょう」と「合唱塾」提案しました。2019年4月下旬に提案して、6月から合唱塾をスタートさせました。来年からやろうと思っていたら、おそらくできなかったと思いますね。

矢吹▶ 素早い行動が、チーム全体の団結力も高めたのですか。



▲指揮者として

小針▶そうです。合唱塾のスタートはまずは郡山の中学生だけ、合唱連盟に加盟している生徒だけという限定で行いました。そこから数年かけて形を変え、現在は加盟の有無に関わらず、小学生から一般の大人まで参加できるようになっています。県外からの参加もあり、塾生は毎回100名をくだらない。今年の一学期受講生は165名です。合唱塾の売りは、学校の枠を外した、指導者たちが「手の内」を包み隠さず、自分の学校の生徒のように熱心に教えてくれます。「こうやったらうまくなる」という教えを、そ

れぞれの学校や合唱団に持ち帰って、自分たちから伝えていく。この好循環が、生徒だけではなく参加している先生方のスキルアップにもつながっています。たくさんの塾生の前に立って指導することが、やはり学ぶこと大きくつながっています。

矢吹▶子供たちの学びの場だけでなく、教員の方の学びの場でもあるということですね。

小針▶まさにそれです。子供たちと若い教員を育てる — この二本の柱が、当初からの目標でもあり、未来へ向けた夢でもあります。現在、教え子たちが教員になって、30代に手が届こうとしています。彼女たちが、合唱連盟にも入り、合唱塾でも活動してくれている。本当にありがたいことですね。

矢吹▶人が人を育みながら、次の世代へと繋がっていく。これって、とても重要なサイクルですね。

小針▶その通りです。人が人を作る。これはどこの業界でも同じだと思います。技術の前に、人としてどうあるべきか、その人間教育を優先するというこ



▲合唱塾練習風景



▲「^{とき}ねの音」一般合唱団の指揮者・音楽監督として

とが大切であるわけですが、この部分に難しさを感じ、人を育てていくことがおろそかになっている側面があるのではないかと感じています。だからこそ、熱い情熱と志をもって人を育てる人たちが必要なのです。特に震災以降、私たちも本当に多くの人に支えられてここまでできました。

6. 現代の教育現場について

矢吹▶ 働き方改革についても、先生は課題感を持たれているようですね。

小針▶ 本当にそうです。働き方改革は大切ですが、「早く帰ること」が目的ではないのです。学校の教員だって、家に帰ってからテストの採点をしているので、仕事の量は変わらないのです。人間相手の仕事、例えば学校現場や病院での働き方改革ってどうなんだろう。これは複雑な問題です。もちろん、過度な勤務で体を壊すことは避けなくてははいけません。でも、本質的には「やりたい人にはやらせる」「やらない人は無理にやらない」という柔軟性が必要なのではないでしょうか。

矢吹▶ 多様性を認める、ということですね。

小針▶ そうです。「みんなで同じようにしましょう」というのは、日本の悪いところだと思います。みんな違ってそれでいい…です。人それぞれの家庭や状況も違うはず。自分のやれることをそれぞれがやればいい。オーケストラの指揮者は一人でいいし、団員は様々な楽器をもって演奏している。全員が指揮者である必要はない。でも、指揮者の方針を尊重して協力する。私が部活動の顧問をしているときに、副顧問の先生方は陰に陽にサポートしてくれました。私が気づかないところをさりげなくやってくれたり、会計や事務の仕事は完全にお任せしたり、その代わりに、平日の練習は私だけで大丈夫だし、休日も大抵は休んでいただく、大会の引率をお願いするなど、状況に応じて無理のないようにやっていました。

働き方改革は仕事の仕方を見直すことであって、それによってポリシーまで失うことではないと思います。私は忙しい方が好きなのでそれを取られてしまうことがかえってストレスになってしまいます。(笑)



▲合唱塾修了コンサートゲスト出演後の一コマ



▲台湾合唱協会来日の際の講演（1）



▲台湾合唱協会来日の際の講演（2）

7. 子供たちへのメッセージ

矢吹▶最後に、子供たちへのメッセージをお願いしますか。

小針▶最近取り組んだ曲で、佐藤健太郎作曲の『前へ』という曲があります。その歌詞の最後は「毎日の喜びと悲しみを抱きしめながら、一步一步前へ」で終わります。今年度の合唱塾は「震災から15年」

をテーマにしています。震災への思いを忘れない、風化させない…それは大切です。でも、同時にいつも後ろを振り返るのではなく、力強い一歩で前に進める。私も自分の立場で、さらに力強い一歩を積み重ねながら頑張っていきたいと思います。

矢吹▶今日は本当に元気の出るお話を聞かせていただきありがとうございました。

響き合う「群青」の空

— 小針智意子氏が紡ぐ、魂の共鳴

2026年1月。東京芸術劇場の重厚な空間に、一筋の清流のような歌声が響き渡った。日本フィルハーモニー交響楽団の壮大な調べに乗り、福島の子供たちが奏でたのは、南相馬市小高区から生まれた合唱曲『群青』である。客席で目頭を押さえる人々の姿を目の当たりにし、筆者は確信した。音楽とは、単なる音の連りではない。それは、私たちが歩んできた苦難と、それでも失わなかった希望を分かち合うための「共通言語」なのだ。

今回のトップインタビューにお迎えしたのは、福島県合唱連盟副理事長を務め、この「楽都・郡山」の精神的支柱とも言える指揮者、小針智意子氏である。数々の全国大会で頂点を極めてきた小針氏だが、その情熱は今、一般合唱団「季の音」での深い表現の追求、そして「合唱塾」における小中高生への熱心な指導へと注がれている。インタビュー中、氏が語った言葉が今も耳に残って離れない。「合唱とは、隣にいる誰かの声に耳を澄ませ、心を寄せることから始まります」。その精神は、震災という未曾有の経験を経て、私たちが大切に育んできた「共生」の哲学そのものではないか。

思えば、あの『群青』が生まれた背景には、震災によって離ればなれになった仲間への、痛切なまでの想いがあった。しかし、小針氏のタクトから紡ぎ出される音楽は、悲しみを悲しみのままに終わらせない。絶望の淵に立たされた時、人は何に救われるのか。氏は、音楽という祈りを通じて、傷ついた心を癒やし、再び前を向くための勇気を与え続けてきた。震災から15年という節目を迎える今、当研究所が応援し続けてきた日本フィルハーモニー交響楽団と共に、福島の子供たちが堂々と歌い上げた姿は、復興が「物」の再建から、確かな「心」の再生へと、次なるステージに進んだことを証明していた。

小針氏は、技術を教えるだけではない。歌を通じて、次世代の中に「故郷を愛し、人を想う

力」を植え付けている。合唱塾で学ぶ子供たちが、真剣な眼差しで音楽と向き合う姿。そして「季の音」の団員たちが人生の深みを歌声に乗せる姿。この「志の継承」こそが、当研究所が掲げる「持続可能な地域社会」の核心であると、筆者は強く感じた。経済という土台と、文化という翼。その双方が揃って初めて、地域は未来へと羽ばたくことができる。小針氏という一人の指導者を中心に回る美しい循環は、まさに私たちが目指すべき理想の地域像である。

インタビューの終盤、小針氏は柔らかい微笑みを浮かべながらこう語った。「音楽は目に見えませんが、人の心に深く根を張り、困難を乗り越える力になる」。その言葉の重みは、幾多の試練を乗り越え、音楽という祈りに人生を捧げてきた者だけが持ち得る真実味に満ちていた。郡山の空に響き続ける歌声は、これからも世代を超えて受け継がれ、私たちの心を繋ぎ、明日への希望を照らし続けるだろう。

小針智意子という指揮者が灯した情熱の火が、この街の未来を、そして人々の人生をどれほど豊かに照らしてきたか。東京芸術劇場で流れたあの美しい涙は、私たちが共に歩む未来が、決して孤独ではないことを教えてくれている。その価値の大きさを改めて噛み締め、本誌の締めくくりとしたい。

(インタビュー 矢吹 光一)



小針副理事長

矢吹理事長